

審査の結果の要旨

氏名 林 崇 傑

本論文は台湾における歴史保全政策のうち、近年の特色となっている容積移転制度について、その制度創設の経緯をはじめとして、その現在の利用状況、今後の展望を系統的に論じたものである。研究を進めるにあたって台北市内の主要な歴史地区のひとつである迪化街を対象として、容積移転の実際を具体的に検証している。

論文は研究の枠組みを述べた序章と8つの章から成る本論部分、そして結論を述べる結章によって構成されている。巻末に具体的な資料および参考文献を掲載している。

第1章は、序説であり、国際的に見た歴史地区の概念の変遷を明らかにしたのち、歴史地区保全のための主要な手法のひとつとしての容積移転制度の発生をアメリカおよび日本の事例をもとに明らかにしている。とくに容積移転制度は歴史的な背景が地域ごとに異なるためにその適用方法も地域性を有していること、適切な環境管理計画のもと容積の送出地と接受地は同時に計画されなければならないことを明示している。

第2章は、台湾における都市歴史地区の保全施策の発展の歴史を明らかにした章である。民間による保存運動の歴史と国による政策の展開および法令の制定の過程を明らかにし、次いで地方政府による保全施策と規制手法の展開を台北市を事例にして明らかにしている。とりわけ台北市迪化街において、都市計画と都市設計審議制度を利用することによって実効性のある保全施策が実現していることを明らかにしている。

第3章は、台湾における容積移転制度の創設と発展の経緯を詳細に明らかにしている。国レベルでの容積移転制度の採用にあたっては、歴史保存、開放空間の提供および公共用地取得の3つの目的があったことが明らかにされている。次いで台湾においてもっとも先進的に容積移転制度を運用している台北市について、容積移転計画のあり方を8つに分類し、さらに規制手法によって3類型に分類している。特に接受地の様態に関して、MRT駅周辺の開発促進、都市更新の促進、送出地との抱き合わせ指定などの形態の相違を明らかにしている。

第4章は、事例研究として、台北市迪化街を採り上げ、同地区における容積移転の各種事例の検討を行っている。1988年から2005年までに迪化街において実施された103件の都市設計審議案件をすべて検討し、容積移転が実施された延べ107件に関して比較検討を行っている。その結果、いくらかの時期的な相違はあるものの一般的に見て容積移転制度は街区内の歴史的建造物の保存に寄与していること、ただし同制度が効果的に適用される

ためには詳細な運営機構が必要であることを明らかにしている。

第 5 章は、第 4 章で明らかにした容積移転を有効に機能させるための運営機構として台北市の都市設計審議制度を採り上げ、同制度によってどのような都市保全が実現したのかを検証している。1988 年から 2005 年までに実施された合計 176 件の歴史建造物保存に関わる都市設計審議案件をすべて検討し、これらが 3 類型 6 種に分類できることを明らかにし、さらに同時期の全審議案件である 1812 件のなかでの位置づけを論じている。続いて迪化街において同様の調査をさらに詳細に行っている。その結果、都市設計審議を柔軟に行うことによって容積移転制度が有効に活用できることを実証している。

第 6 章は、さらに具体的に台北市迪化街において実際にどのような景観形成が実現しているのかを現地調査をもとに明らかにしている。また、接受地において発生した 2 件の係争事例を分析し、容積移転が都市景観全体に及ぼす影響を明らかにしている。移転容積総量に制限を設ける均衡機構の導入を提言している。また、容積移転のタイミングをコントロールするために都市設計審議が果たしている役割が大きいことを評価している。

第 7 章は、容積移転制度の側からではなく、歴史地区側から見た際の容積移転制度の評価を試みている。同制度が都市保全の側面からも高く評価できることを示したのち、同制度の運用にあたり透明な情報プラットフォームの形成が必要であることを強調している。

第 8 章は、第 7 章に引き続き、容積移転制度の都市保全における有効性を台湾全土の議論として展開している。容積移転が成功するための 4 要件をまとめている。

結章では、全体として容積移転制度の肯定的な評価を導き出していると同時に、その条件として制度運営のための機構が十全に機能するべきことを示している。また、今後の台湾における容積移転制度の改善に向けた提言をまとめている。

以上、本論文は台湾における容積移転制度を総括的にまとめた最初の論文であり、台北市の詳細な事例研究をもとに同制度の有効性と今後の展開方向に関して、示唆に富む結論をまとめている。この結論は台湾のみならず、日本をはじめ東アジア全域に亘って有効な考察となっており、その有用性は非常に高いといえる。

よって本論文は博士（工学）の学位申請論文として合格と認められる。